

2009年1月から2013年8月までに当院に脳血管障害で入院された患者さんへのお知らせ

課題名「急性期脳梗塞患者の血管内治療における再閉塞患者の臨床像に関する研究」

脳梗塞は、脳の血管が詰まり、脳へ血液が流れなくなることで起こる疾患です。心臓や胸部大動脈、頸動脈などから血栓（血のかたまり）やコレステロールのかたまりなどが脳血管へ流れ込み、脳血管を閉塞することが原因の一つです。血管内治療は、詰まった血管を再開通させる治療です。詰まった血栓などの物質をカテーテルを用いて回収したり、血栓の近傍に血栓を溶解する薬を注入するなどを行い、再開通を目指します。この治療は発症早期の方にはしか行えない治療であり適応に限りはあります。血管内治療は手や足の動脈を伝って脳の動脈までカテーテルを挿入する侵襲的な検査ですが、すでに確立された治療手技として世界的に広く行われています。当院ではカテーテル操作に熟練した血管内治療の専門医が指導する体制を構築し、かつ複数の医師にて行うことで安全性の確立に努めています。

この血管内治療によって詰まっていた血管が再開通しても、再び閉塞してしまう患者さんがいます。このような方はその後の回復もあまりよくないことが言われておりますが、どのような場合に再閉塞してしまうのか詳しく分かっていません。そこで当院に入院された患者さんで、血管内治療を施行した方を対象に、画像検査や臨床的特徴などについて、患者さんの診療データを用いて後方視的調査研究（カルテ調査により問題点、疑問点を解決する研究）を実施することにしました。

この研究は、2009年1月から2013年8月までに当科へ入院され、血管内治療を行った患者さんが対象です。診療で得られた画像（CT、MRI、エコー、カテーテル検査）所見と脳卒中の重症度スケールや、血液検査所見などを比較して検討を行います。今回、この研究を行なうことについて同意をいただけない場合には登録情報を全て破棄しますが、すでに学会発表や論文で発表されている場合には破棄できない場合もあります。

患者さんの情報については個人名や個人を特定できるデータは伏せており、当院の個人情報保護規程に従って厳密に管理し、第三者が閲覧することはありません。また、この研究で患者さんは不利益を被ることはありません。本研究は倫理委員会の承認を得ております。研究をするために必要な資金をスポンサー（製薬会社など）から提供してもらうことにより、その結果の判断に利害が発生し、結果の判断にひずみがおこりかねない状態を利益相反状態といいます。利益相反については、本研究はカルテデータをもとにした後ろ向き研究であり研究資金は必要としないため、利益相反の状態にならないことを利益相反委員会に申告しています。

この研究に対して、ご質問がある方は、下記担当者までご連絡ください。

担当： 川崎医科大学附属病院 脳卒中科 臨床助教 作田健一  
岡山県倉敷市松島 577 TEL : 086-462-1111 FAX : 086-464-1128